

手記

私自身の選択した十年間の青春

北海道 堀 勇二郎

枝幸郡浜頓別村で五男一女の次男として大正十（一九二一）年一月十八日生を受け、翌十一年小樽に移住、奥沢小学校、第一高等小学校を卒業しました。

就職先は木材商の店員として、徒弟制度のあった時代ですから、住み込みのアンチャンと言われた時代でした。御主人御夫妻はじめ御家族の皆さんも家族同様に扱って下さった日々を過ごしていました。

昭和九（一九三四）年、既に満州事変の真つ最中で、出征する兵隊さんを何度も送った事が思い出され

ます。当時は国民の三大義務として教育・納税・兵役制度があり、現役兵として入隊して満二年で満期除隊でき、健康な男子は十八歳で志願する事ができた時代でした。

いずれにしても軍隊に行くのなら早く行って二年で帰るつもりで、御主人の許可を得て、昭和十四年、徴兵検査を公会堂で。甲種合格となり、翌昭和十五年三月、旭川歩兵二十六連隊（後の二部隊）歩兵砲中隊に入隊したのです。

昭和十六年十二月八日、日米開戦、私は伍長に任官して初年兵教育の任に当たっておりましたが、翌十七年五月、動員、六月七日未明、アッツ島に上陸。アリュート族が三十数人のみで、秋十月、キスカ島に（注 その間の出来事は省略）。連日の空爆、艦砲射撃

も、十七年五月二十九日、アツツ島玉砕以来一段と激しさを増し、全く奇跡の撤退作戦成功をなし遂げ、北千島幌筵島に十八年七月二十九日上陸。陣地構築や防空壕掘りの日夜でした。

昭和二十年三月、南千島師団編成要員として将校下士官に転属命令が出て、その一員として帯広で部隊編成、根室から色丹島に赴任、入隊して既に五年、二十四歳になっていました。曹長として人事功績係の任に当たり、助手と一つの幕舎で各地の戦況を命令受領（毎日）、大隊本部で大隊長（高木大尉）から下達されていきました。八月十五日の玉音放送を耳にしたときは来るべき時が来たと感無量。

なお、この部隊は、八十九師団衛生隊として、兵器は帯剣一本、衛生隊の装備は一切なく、それより以前に帯広で驚いたのは、みんな一つ星の兵隊で年令は四十歳前後、二つ星、三つ星の方も二、三十人いたやに記憶、社会人として妻帯しておられる人がほとんどでした。今は亡き北川さんや東京に引越された番匠さんのような社会人として地位ある方も多く、更に満州事

変に応召され歓呼の声で送った佐々木さん（当時は奥沢町で自転車販売の自営業）、現在は赤岩の団地に転居され時々電話で消息を確かめて合っております。

まずこの島では一度も敵機の攻撃もなく、戦闘行動のなかった事。峯木十一郎少将（南千島方面軍司令官）の命令で「兵器、爆薬、糧秣は穴澗湾に集結せよ」、ヤルタ会谈ボツダム宣言で全員北海道に帰国する、ソ連軍によって実施されると。私は不思議に思いました。九月一日にソ連船団が入港して我々を日本国に帰す訳はないし、既に八月十五日で日本軍の組織は解体された訳で、何のために八月十五日から九月一日までそんな作業が必要なのか。当時は漁民もおり漁船で兵員全員の輸送できたのにと。約一週間はソ連船に糧秣の積込作業に従事、毎朝点呼で、飯盒飯で空きっ腹に耐えた毎日でした。

全員を収容するやすかさず人員点呼、五列に並べて（数えやすくこれが彼等の流儀でした）、そして五十人単位に仕分けをし、これが一個小隊となり、棟数は二十棟くらいあり、大隊長は九州出身陸士出の馬渡大尉

でした。何せ言葉が通じないのが一番の難敵、何とか簡単なことは手ぶり足ぶりの日常で、まず第一に服装検査、危険物は物言わず没収されました。要領のいい者はナイフぐらいは隠し持っており、これが後日スプーン作りに役立っていた覚えがある。私は小隊長と馬渡大尉から命令され五十人の責任者となった訳で、将校の何人かは中隊長となり、当初三カ月くらい将校の帯刀を許可した訳は日本兵の反乱を恐れていたらしく、その分所分所で格差はあったようです。

二年目の後半から、我が分所にも頭の良いのがいて、ソ連からの要請で民主運動がボツボツと起こり、初め先ず将校を反動分子として台上に立たせ軍隊時代の悪事をあばき、厳冬時の大便是朝にはコロコロになるのでその始末をさせたり、ソ連側の指示で実行させたのです。こうするうちに将校は一カ所に収容されたとの噂もあり、日本人同士で罪のあばき合いをしている姿は、早く帰りたい一心でソ連の口車に乗ったものであり、結局は民主運動の指導者として早くは帰れなかったはずです。

何と言っても我々の作業の監督は囚人であり、その中には泥棒傷害等でシベリア送りになり私達と入れかわった程度の低い者であるが、その中では陸軍大尉のニコライさんは政治犯なので学識もあり、私に曰く「スターリン時代は必ず崩壊する」と温和な人とか何か付き合った事もあり、私はニコライさんに「民主主義者を早く帰国させるとおおり立てているが、作業もできない年老いた人を帰す得策をとらないのか」と意見を交わした事もあり、全く同感と賛同してもらった思いもあり、今は亡き北川さんは昭和二十二年頃帰国されているはずです。食糧事情に関しては、シベリア鉄道で週二便の輸送量で馬糧のエンバクを食べたりヒエを食べて糞づまり、お互い四つんばいになって尻をほじって出したりで、正当な理由で抗議しても聞き入れられる事なく、二言目には「おまえたちは捕虜だぞ」という日々でした。

昭和二十二年冬、栄養失調で半月ほど入院中に見たものは、朝起きて死を確認すると丸太棒扱いし、病院の隣にバラック小屋が二棟あり、そこへ放り込んで、

凍土が解氷される夏、大きな穴を掘って一緒に埋めたもので、テレビで放映されている墓標の下には骨のひとかけらもないと確信できます。粗末な病院で栄養食など一度も口にした事もなく、診断もお粗末なもので尻を引っ張って栄養失調と診断、聴診器を持っていく医師はほとんどいない有様、入院すなわち死に場所でした。

民主運動も日増しに活発になり、日本人同士も信用できない状態になり、収容所を三カ所移動しましたが、我が身をかばう醜い人間の本能を見せつけられ、いかにスターリンの共産主義思想が当時のソ連人民自身を苦しめたのか。

ドイツ軍との戦いで相当に損害を受けたことでしょが、日ソ不可侵条約を破棄しての参戦、決して忘れられない、歴史のページで終わらせてはならない。遺恨と屈辱は、我等捕虜に残された過去で、深く心に刻まれております。

ソ連からロシアに変わり、大統領も変わって新時代の幕明けとなった今日でも捕虜の汚名は消え去るもの

ではないと思います。

抑留中の三交代の作業。朝八時から午後五時、主な作業は、森林伐採、鉄道崖の爆破等。五時から夜中十二時の作業は主として昼間爆破した碎石（クラッシュャー）作業。夜中十二時から朝八時の作業は碎石作業と碎いたバラスの貨車積み。服装は二十一、二年頃までは日本の軍服にソ連から支給された綿入れの防寒服。防寒靴はソ連製のもので布で、靴下等は支給されたことは一切なく、歩くのがやつの状態で、作業が出来るのが不思議なほどの状態で、夏の来るのがどんなにか楽しかったことでした。

トイレもお粗末、隣りとの仕切りもなく、冬期の夜間は苦痛でした。空を仰ぎ見て北斗七星を見上げ故国の両親や弟の姿をしのんだものです。

ソフガワニ軍港からどれくらい奥地へ入ったのか、ムーリー地区と言われていましたが、その後移動した所は地名すら忘却のかなたに消えましたが、昭和二十二年頃から帰還が始まり、作業に耐えられない人達から順次帰国のためナホトカに集結。

早く帰りたい帰りたいとの日々でしたが、責任のある立場だったので誰を帰すかと収容所長に進言をして、バスポートも持たされた。その頃将校はモスクワ方面に集結させられていたようです。

昭和二十四年六月、私達の収容所全員の移動、ナホトカに集結。最終チェックで警察官、憲兵等身上調査もきびしく、何人かは残されました。

第一大拓丸に乗船したときの感慨は今もほうふつとしてよみがえってきます。

七月七日舞鶴上陸。わざわざ新潟から叔父（母の弟）の出迎えを受け（両親は新潟出身）、帰還名簿で留守宅に連絡があったようです。大歓待を受け、白米（こしひかり）の味は今でも忘れる事はできません。リュックサックいっぱいのだんごを背負って、青函連絡船で近くの人達に振る舞った事を思い出します。

七月十五日小樽（小樽住吉神社）に帰り大歓待を受け、この日どんなに待ち焦がれたことでしょう。

既に帰っておられた北川さんが北友会を結成されており、既に帰っておられた三十七人の小樽在住の方も

歓迎会に出席、感激でした。

以来北川さんを中心に毎年、ニセコ、定山溪、市内でと、北友会の集まりは楽しかった。

当時、北川さんの実家は質屋でしたが、御本人は小樽港運に勤務しておられ、年齢を感じさせない若々しさ、同僚の間では万年青年としてうらやましい存在でした。奥さんも多彩な趣味の持ち主で、何回か自宅に用事でお伺いしたものです。

突如病にたおれられ、以後何年か北川さんの指名で――一番若かったせいでした。

札幌病院（銭函）に奥さんも入院され、毎年（二度ほど）お見舞いにお伺いしました。筋萎縮病で丸くなって休んでおられたのが見納めでした。

二月、突然電話で計報を受け、早速電話で連絡し、桃内の木谷建設の社長さん、前述の佐々木さんと出席。その電話をして下さったのが十和田さんでした。弔問に早速お伺いし、玄関でお会いしたのが十和田さんと直感しました。

葬儀は花口町の天理会館で、私も北友会代表として

弔辞を捧げ、家人に乞われて火葬場に納骨を済ませて参りました。

全抑協の先駆者として常に指導者として御苦勞をされました。本当に色丹島で巡り合った十歳以上の先輩に多くの事を教わり、その事が私の人生にプラスに、その時その時に役立てたことにただ感謝あるのみです。

振り返って私の人生に五年間の軍隊生活、四年余に及ぶ屈辱の人生、これが私の宿命と思っております。

アツツ島、キスカ島、幌筈島の戦記は抑留生活とは関係ないので省略いたしました。

【執筆者の紹介】

堀勇二郎氏は、旧日本軍隊の中堅幹部として隊員を統率した軍歴を有しています。

北海道におけるシベリア抑留補償要求運動の先駆者、北川小樽支部長の信頼も厚い人柄です。

小樽における運動の論点について、筆者と紹介者が会話に花を咲かした事が印象的でした。

後日のためにその主なるものを挙げますと次の点です。

我々抑留被害者が補償を求めるためには、被害の事実を正直に正確に取りまとめ、かつ当時有効に存在する国際法としては一九二九年捕虜条約に基づいた主張をすべきところ、大半の被害者が帰国復員後締結された一九四九年捕虜条約を主たる請求理論としたために、裁判官の職務権限として敗訴の判決を出さざるを得ない事情があったのです。

筆者は健康上優れていませんが、シベリア関係運動には活動者のため紹介しました。

(北海道 安田 忠雄)

ソ連強制抑留よもやま話

北海道 佐々木 佳明

終戦間際に白城子飛行場警備大隊は白城子から奉天(瀋陽)に移動した。昭和二十(一九四五)年八月十